

『アコーディオン・ジャーナル』の価値

加藤 徹 KATO Toru

2021年6月22日

目次

アコーディオン・ジャーナルとは？.....	2
アコーディオン・ジャーナルの時代背景.....	4
まだ地方が元気だったころ.....	5
アコの「戦国時代」だった昭和.....	6
人間理解が隠し味.....	9
アコを弾くシーンの多様さ.....	10
人物の半生をたどれる.....	12
インターネットで検索してもヒットしない情報・知識の宝庫.....	15
【参考】 バンドネオンやコンサーティーナについての記事.....	16
【付録】 金子先生から谷口楽器への書簡.....	18



1950年代の谷口楽器

アコーディオン・ジャーナルとは？



創刊号の表紙。写真は横森良造氏

『アコーディオン・ジャーナル』（以下、略称で「アコジャ」）は、イタリア製エキセルシァー・アコーディオン(EXCELSIOR Accordion)の販売促進ならびにアコーディオン音楽の発展を目的として、(株)谷口楽器から刊行されていたアコーディオン専門誌です。他の楽器の専門誌と比較しても、

- 発行期間が昭和37年(1962)から平成18年(2006)まで44年もの長きに及んだ
- 記事の内容は国内外にわたり幅広い
- 硬い記事と柔らかい記事のバランスが取れている
- 編集者が日本を代表するアコーディオニストで音楽事情を熟知していた

など様々な点でユニークでした。

過去の日本の国内外の音楽シーンを研究するうえでの貴重な資料であるだけ

でなく、21世紀の今も読み物としての面白さを保っています。

昭和37年(1962年)から平成18年(2006年)まで続いたアコジャの歴史は、大きく分けて、月刊誌時代と季刊誌時代に分かれます。

編集者は金子元孝氏(かねこ・もとたか 1925年9月14日-2007年7月10日 晩年は「金子万久」と改名)が一貫して担当しました。



★1966年9月号 p.6の金子氏の写真→

○月刊誌時代 1962年-1994年

創刊号 1962年(昭和37年)12月号

休刊前最終号 1994年(平成6年)3月号・通巻376号

発行者 日本エキセルシャー・アコーディオン・クラブ(谷口楽器内)
会員制をとり、1962年の発刊当時は年会費500円だった。

その後、数回の値上げを経て、1994年の停刊時は年会費4000円だった。

○季刊誌時代 1995年-2006年

復刊第1号 1995年(平成7年)秋号

最終号 2006年(平成18年)夏号 復刊44号 通刊420号

発行者 日本エキセルシャー・アコーディオン・クラブ 発行人・谷口賢
季刊誌時代は無料。

アコジャは、昭和・平成期の日本の国内外の音楽シーンを知るうえで比類のない一次資料です。

令和の今、読み返すと、純粋に読み物としてもたいへん面白い。

アコーディオン(以下「アコ」)という楽器を通して、当時の人間の本音や社会の空気がよくわかり、他の書籍にはない面白さがあります。

不肖・加藤徹はアコーディオンのアマチュア愛好者にすぎず、金子元孝先生

(晩年は金子万久と改名)の門を叩いたことがあるだけです。

以下、1人のアコ好きの感想としてアコジャの価値と面白さについて述べます。

なお『アコーディオン・ジャーナル』は、発行時期によって「・」なしの「アコーディオンジャーナル」だったりしますが、本稿では『アコーディオン・ジャーナル』で統一します。

アコーディオン・ジャーナルの時代背景

アコジャが誕生したのは昭和の高度成長期でした。日本も大衆も元気でした。

ビアホールは連日超満員で、アコの生演奏が鳴り響き、日本の津々浦々にアコ・サークルやアコ教室が雨後の竹の子のように誕生し、楽器屋には新品のアコがずらりと並んでいたのです。

編集者・金子氏は、毎日午後1時～2時ごろ、お茶の水の谷口楽器に来て、机に向かって編集作業をしました。夜は東京都港区赤坂1-1-16にあった伝説的なビアホール「ベルマンズポルカ」BEERMAN'S POLKAで、クロマティック式ボタン・アコを演奏。その他の時間も、アコの出張演奏や授業など、多忙な日々を送りました。

★2006年夏号 p.4(下の写真)で、編集者・金子万久氏(金子元孝氏の晩年の筆名)は、昭和中期の世相を回想しています(引用文中の下線は加藤)。

(前略)会社の経費として思う存分飲み食い出来た「社用族」。サラリーマンが盆暮れに貰う賞与の袋の中には、もう一つ特別賞与の袋が入って

いた。ラジオには毎朝「アコーディオン独奏の時間」(5分間だったが)があった。毎年12月に行われる“日本のうたごえ祭典”は全国から三百名を越すアコ奏者が武道館のステージに乗り切れず、指揮者は客席から棒を振った。アコーディオン・ジャーナルはそんな時代の産物だったと言えないだろうか。(中略)当時は東京どこを歩いても



楽器店は通りから見えるショーケースにアコを飾っていた。銀座ヤマハ店正面ロビーに高いスタンドが設けられ上で輸入されたばかりのグリーンパールのアコがグルグル廻っているのを見た人もきつというだろう。

1962年から2006年まで、金子氏が一貫して編集を手がけたアコジャは、国内外の音楽シーンをリアルタイムで紹介するとともに、日本全国の読者からの寄稿や写真も豊富に載せた第一級の史料です。

昔をなつかしく思う昭和世代はもちろん、今の若い人が読んで、日本の戦後はこんな荒々しい活気に満ちていたのか、とワクワクするはずです。

まだ地方が元気だったころ

アコジャを読むと、昭和の日本では名古屋や大阪といった都会はもちろん、全国津々浦々にアコの愛好家や指導者がいて、東京一極ではなかったことに改めて驚きます。

例えば、北海道の大地でもアコは高らかに鳴り響いていました。

★1967年8月号 表紙の写真(右)、およびp.5「初のリサイタルを成功させた札幌 桑山真弓 音楽 歌謡曲 アコーディオン 教室」

桑山真弓氏は、アコーディオニストの桑山哲也氏(1972年生まれ)のお父さんです。

地方のアコ・サークルやアコ教室の写真や記事もたくさんあります。もし、あなたの身内にアコを弾く人がいたら、その人の名前もアコジャに載っているかもしれません。



★1972年2月号 写真「広島アコーディオン教室は全国でも最も熱心ぞろいと

いう定評をもっている。(以下略)」

不肖・加藤は1993年から2006年まで広島に住み、その間、広島アコーディオン教室にも参加していました。アコジャには、私が参加する前の広島アコ教室が何度も紹介されています。

アコの「戦国時代」だった昭和

昭和のアコ弾きはサムライでした。男も女も、プロもアマも、それぞれ二天一流の宮本武蔵とか、巖流（がんりゅう）の佐々木小次郎とか、まるで剣豪のようなプライドと秘技をもっていました。アコのサムライたちは、時にはアコを世に広める同志として団結し、時には音楽の道に対する考えの違いから戦いました。

高級品 vs 安物。リアルな戦場では、芸術品の名刀より、無銘の安物の刀のほうが人を斬れる、という説があります。次の記事を読むとアコも同様のようです。

★1963年6月号 p.8 「ニュートーカー専用 望月真也氏」

欧州製 120 ベースにあらずんばアコにあらず、のような舶来崇拜の風潮を尻目に、あえて国産 80 ベースで演奏会に参戦し、

「なんだかんだとおっしゃるかも知れませんが、あの演奏会で私のアコが一番安いでしてね」
とうそぶき、「にくたらしいほどうまい」と評された望月真也氏の紹介記事。

ニュートーカー専用
望月真也氏



令和の今日では、女性奏者が増えたこともあり、小さくてかわいいアコを好む人も増えました。しかし日本がまだ貧しかった昭和30年代には、120 ベースを買えず、悔し涙を流すサムライもいたのです。

★1964年12月号 p.8-p.9 「ぼくのあこーでおん日誌③小堀義彦」

昭和36年(1961年)11月10日、群馬県館林市のコーラスグループが集結しての「うたごえ」の祭典。大衆的な社会運動なのに、終結したアコは120 ベースが2台、80 ベースが5台もあったそうです。今なら普通ですが、まだ日本が貧しか

ディオニストで編集者の金子元孝氏のプロ礼賛論に、自称「青二才」が噛みつく
次の記事は、まるでプロレスです。面白いです。

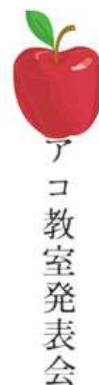
★1964年12月号 p. 4-p. 5 丸山晃市「アマチュア礼賛」

「先月にK, 金子氏がプロ礼賛を書いたから、今月はアマチュア礼賛をぼくに書けと申す。」「金子氏は、プロ礼賛を、アマの考え方を拒否する形で表現した。ぼくに言わせれば、このような形で礼賛なぞとエラぶるのは、いささかピントはずれの感である。」

プロ vs プロの記事もあります。他誌なら、なあなあ筆致になるところでしょう。でもアコジャでは、火花を散らすガチの記事になります。

★1967年8月号 p. 2 「聴衆はまばらでも意欲を見せた ●●アコ教室発表会」

こちらではあえて「●●」と伏せ字にしておきます。すみません。ぜひ、谷口楽器の店頭で、アコジャの該当箇所の記事をご覧ください！



聴衆はまばらでも
意欲を見せた



アコーディオン教室の第3回コンサートは本誌先月号
で既報のように7月2日（日）に東京新宿厚生年金小ホール
で行なわれた。午後6時の開演時間には七百名人このホー

そうした意味でアコーディオン界のよき清涼剤となってくれ
ている。

入場無料でこの数々の演奏が完りものでないということは

●●アコーディオン教室の主宰・●●氏は、アコジャの編集者・金子氏のライバルのプロ奏者でした。金子・●●の両雄は、弾く楽器のタイプも、音楽の方向性も違いました。

金子氏がみずから執筆したこのレポによると、●●氏はしつこいほど「楽器屋さんのヒモ付きではありません」と繰り返した、とのこと。アコジャと谷口楽器の関係へのあてつけ、と勘ぐられてもしかたないですよ(^_^;;

金子氏の舌鋒の鋭さも、負けていません。

「七百名入るこのホールに約二十名ほどしか客が着席しておらず(中略)司会者の読み上げる地方からの祝電の『…ご盛會を祝し…』という文句もなにか妙な気持でできた」

「あの曲をああ弾かれたんではガッカリ」

「最後に小泉幸雄氏の演會はこの日の唯一の売れる演奏の標本」

「しかし何はともあれクラシックに取組んでいるところを見せてくれる●●教室に今後を大いに期待してよいであろう」

なお、著名なアコーディオニストである●●氏のお名前はアコジャにもよく登場します。他の号では普通に●●氏の演奏を賞賛する記事も載っていますので、ご安心ください(^_^;;

このように、月刊誌時代のアコジャは、特にその初期は、アコを背負ったサムライたちの真剣勝負の火花に満ちています。

人間理解が隠し味

アコジャの隠し味は、音楽と「人間」を見る編集者・金子氏の見方の奥深さです。世にアコーディオニストは多けれど、演奏家として、またアコ教師として、金子氏ほど多彩な人間とかかわった人はまれと言えましょう。例えば次の記事。

★1994年3月号 p.6-p.7 金子元孝「レッスン百景 アコの特殊性でいろんな目にあいました」

私をはじめ先生から渋谷の楽器店2階のアコ教室を譲られて「先生」としてスタートし、その曜日に行った日、生徒が二人来ていて背中合せで練習していた。一方は歌声運動の斗士で「沖縄を返せ」(彼らは今だに「千島を返せ」とは言わない)とか労働歌ばかり、一方は、蛇腹を聞くとそこにはおごそかに十字架が出てくるアコーディオンを使って讚美歌を弾くキリスト教伝道の女の子であった。私にとつての最初の試練(?)だった。

(中略)

新潟県から私の家(加藤注:金子先生のご自宅は東京都文京区にあった)に午前10時頃着くようにレッスンに通って来た人もいる。雪の朝なんか寒くて私は布

団から離れ難い… Give me five minutes more, only five minutes more in my bed…だが、ふと、あッ、今日は彼がもう、既に、うしろへアコを積んでオートバイで夜の明りきらない内に新潟を発ってこっちへ向って走ってるんだな…と思うと、時計見て「いけね！」とハネ起きる。「練馬なんですけど近くにアコ教えてください先生いませんか…。」みたいな電話がよくある。そんな人には「私の所へは四国からも見えます。」と返事して切る。飛行機で一時間ですから…とその人は気軽に言う。

もう、既に、うしろへアコを積んでオートバイで夜の明けきらない内に新潟を発ってこっちへ向って走ってるんだな…と思うと、時計見て「いけね！」とハネ起きる。「練馬なんですけど近くにアコ教えてください先生いませんか…。」みたいな電話がよくある。そんな人には「私の所へは四国からも見えます。」と返事して切る。飛行機で一時間ですから…とその人は気軽に言う。

ストリップ劇場の楽屋で

「ある奥さんが最高級なアコをお買上げくださったので、出張教授に行っていたらけませんか。」と楽器店から

その他、

浅草のストリップ劇場へ出張授業、
アコを弾く演技だけ習いたいタレント、
音大の教授よりもうまい音大生やタンゴ楽団のプロ奏者への授業、
逆に全然やる気のない子供への授業、

等々、びっくりするほど多彩です。

おそらく、ピアノ教室とかフルート教室の生徒よりも、アコの生徒のほうが、それぞれ個性的なのではないでしょうか。

アコジャは毎号、プロもアマチュアも「なるほど」と唸るような内容を必ず載せています。まじめな内容もあれば、ユーモア漫画やジョークなど柔らかい内容もある。サービス精神の裏には、編集者金子氏の幅広い人間体験があります。

アコを弾くシーンの多様さ

アコジャの魅力の一つは、写真の多彩さです。

日本の庶民の家族バンドの写真、海外のプロの写真。ビアホールやコンサートホールなど屋内の写真、町なかや大自然のなかなど屋外の写真、……

アコは、どこへでも運べて、いつでも弾ける楽器です。ピアノやオルガンの専門誌の写真は、ここまで多様ではないでしょう。

アコジャの写真付き記事を見ていると、自分が過去の国内外を旅行している気分になります。

アコジャには戦前を回顧する記事も多い。

★1970年3月号 p.7 戦前の写真・トンボのリリコをもつ水の江滝子氏

戦前、宝塚少女歌劇の男役としてピカイチだったターキーこと水の江滝子氏が、これまた戦前の国産アコの傑作リリコを手にした写真。アコジャは、国内外の古今の写真を楽しめるのも魅力です。

ちなみにこのリリコ、不肖・加藤徹も持っています。

編集者の金子氏は戦時中に兵隊に取られた世代でしたが、読者にも同世代が少なくありませんでした。

珍しい写真 — 2 —



戦後すでに25年なんだから戦前といえば30年はたっているだろう。その頃のターキーこと水の江滝子さんです。さすがに当時の宝塚少女歌劇の男役としてピカイチだけのことはあるなあとの写真を見て感ずる。マスクの出来といいスタイルといいその可憐なことバツグンじゃありませんか。ただ

★1974年5月号 p.7 田中房治「日華事変のさなかに」

日中戦争の激戦、長沙作戦(1941年-42年)でからくも生き残ったあと、武昌の町で、奇跡的に酒保(しゅほ)に置いてあったフランス製 41 鍵盤 80 ベースのアコを「抱き、気の狂ったように弾いて弾いて弾きまくった」体験記。やっぱり平和が一番ですね。

アコは労働運動や反戦運動、社会主義ともよくなじむ楽器でした。

★1978年6月号 p.8-p.10 相川充弘「たのしかった戸隠高原 アコーデオンのパス旅行」

★1978年6月号 p.4-p.5 「ピョンヤン(平壤) 学生少年芸術団を観る」

★1986年8月号 p.4 窪田聡「ピョンヤンは水と緑と歌の街 五月の北朝鮮を

見学」

アコジャは毎号、全国の読者からのお便りや写真も多く掲載しました。

海外を旅行した読者による、世界各地の日常風景に溶け込むアコの写真も、楽しいです。

★1988年12月号 p.2-p.3 「アコをたずねて三千里 2」

「なんとどかなブラジルの田園風景。バンドネオンは日本のように構えて考えるものじゃない。子どもたちが自然の中で親しんじゃっている。羨ましいと言うほかない」

など、見ているだけで旅行気分にひたってなごめる写真が満載です。



ドナウ河に行く遊覧船の上である。これがなんとノスタルジーをそそる景色で本日の見えるウィーン式ボクシング・アコ。旅行中の若山さんがナイス・キャッチ。

なんとどかなブラジルの田園風景。バンドネオンは日本のように構えて考えるものじゃない。子どもたちが自然の中で親しんじゃっている。羨ましいと言うほかない。



アコをたずねて三千里 2

「アコをたずねて三千里」の血涙を留しむ読者から、

わずかな出会いのことで、海外旅行では、アコ・ブレイクを

人物の半生をたどれる

アコジャの1962年から2006年まで、足かけ45年の歳月は、長い。国内外の多数の人々の半生をリアルタイムの記事でたどれるほどです。

一例をあげると、1962年12月号(創刊号)で「天才かも知れない」と紹介された5歳の少女は、その後もアコジャにたびたび登場し、世界的演奏者になるまでの足跡を本誌で追えます。

御喜美江(みきみえ)氏に「無名時代」がなかったことに、あらためて驚きを禁じ得ません。

★1962年12月号(創刊号)p.6 写真「トンボ発表会で拍手を浴びた伴(典哉)教室の御喜美江(5才)」

「五才の女の子は愛らしく、演奏も大人並み。一種の天才かも知れない」。

金子先生は予言者ですね。

近年、ネット等に子どもの顔写真をアップすることについていろいろ議論があるため、5歳の天才少女の写真の顔は、こちらではリンゴマークで隠しておきます。すみません。

ぜひ、谷口楽器の店頭で、アコジャの該当頁の写真をご覧ください。



トロボ発表会で拍手を浴びた伴室教の御喜美江(5才)

★1965年4月号 p.12 写真「トロボ教室の御喜美江ちゃん」

★1967年3月号 p.2 写真「おもちゃの兵隊さんマーチと七つの子のヴァリエーションを弾いた御喜美江さん(小学校四年生)」

★1970年5月号 p.2-p.3 御喜美江(13歳)「トロッシンゲン音楽院 春季講習会に参加して 《プロブスト先生からの個人レッスン一週間》」

1970年3月、当時、中学1年生の御喜美江氏は、アコーディオンを肩からかけて一人旅でドイツに渡り、アコの春季講習会に参加(!) その堂々たる手記がこれです。

「私はこの貴重な体験でこれから一生けんめいアコーディオンとドイツ語を勉強しようと思っています。今年行ったおかげで3年間スタートを早めることが出来たことを思うとうれしく感じています。」

さきほどと同じ理由で写真にリンゴマークを貼

♪ 1970年5月号「トロッシンゲン音楽院 春季講習会に参加して」のページに掲載された御喜美江さんの写真。彼女の顔はリンゴマークで隠されています。

♪ 1970年5月号「トロッシンゲン音楽院 春季講習会に参加して」のページに掲載された御喜美江さんの写真。彼女の顔はリンゴマークで隠されています。

♪ 1970年5月号「トロッシンゲン音楽院 春季講習会に参加して」のページに掲載された御喜美江さんの写真。彼女の顔はリンゴマークで隠されています。

御喜美江

トロッシンゲン音楽院
春季講習会に参加して

▲プロブスト先生からの個人レッスン一週間▼



上写真は講習会場、トロッシンゲン音楽院の入口。左がこの一文をお書き下さった御喜美江さん。はじめての海外旅行ではあったが幸い通訳の方も付添ってくれ周囲から心あたまる教諭をうけ、いかにもたのしくその日その日の勉強に励みつつあるといった表情。右が御喜美江さんにとってははじめてのドイツ人の先生でショップ先生。おそろいな花柄のブラウスに黄緑色のパンタロン、プロブストの長髪に髪を束ねたお嬢さん。顔でしか「ボクもこんな先生に教われれば何れも出すんだがア」なんて内心思ってる人は……。

らせていただきます。すみません。ぜひ、谷口楽器の店頭で、アコジャの該当号をお読みください。

同じ号の、編集部(金子元孝氏)による記事「アコーディオンで身をたてたというY君へ プロとなるために考えておきたいこと」も必読です！

★1979年3月号 p.4 写真「1972年トロシゲン市立音楽院入学。クリゲンタール(東独)で行われた世界アコ・コンテストに二回優勝。学校の夏休みにはじめて帰国した時、母校の新しい講堂でリサイタルが行われたが、フリー・ベースによる完成されたテクニックにアコ・ファンは驚きの眼をみはった。現在、西ドイツのハノーパー国立音楽院ピアノ科在籍」

(この他にも記事多数。紙数の都合で、途中略)

★1993年10月号 p.10 「世界アコーディオン・コンテストの実感」

上記以外にも御喜美江氏はよくアコジャに登場します。

御喜美江氏の5歳の写真(1962年12月号)には、すでに今のおもかげがあります。

一方、★1979年6月号 p.10 のcobaこと小林靖宏氏の19歳の時の写真は、髪型も雰囲気も今のcobaとは全然違い、興味深いです。

右の写真では解像度が低くて、よくわからないと思います。

ぜひ、谷口楽器の店頭で、アコジャの該当箇所をご覧ください。

有名人だけではありません。アコを通じて世の一隅を照らした人々とか、家族で演奏を楽しむ一般人など、無名人の投稿写真やお便りも、たくさん収録されています。

北海道の森山松里子さんフジテレビ賞
寺田さんは親子入賞

小林靖宏君 (19才) 優勝
松下 仁君 (関西) 連続優勝



アコーディオン150年祭日前公演のあと、ひと息ついた十日後の4月30日も、日劇第一日と同じ快晴に恵まれ、朝の空気が都心とは思えないほど冷たく爽快だった。また連休ですきすきの大通りを日に岩へ向ってタクシーを飛ばした。

オン音楽に精通した人を審査員に……という強い要望があったことにもよるが、それはまた想像以上に主催側に対する負担が大きかった。出費的な面ばかりではなく、例えば、前日までに、出場名簿をローマ字に、曲名、作曲者名を原語

もしかすると、あなたの知人の名前や若き日の写真も、アコジャの中に眠っているかもしれません。

インターネットで検索してもヒットしない情報・知識の宝庫

アコジャの毎号に載せるアコの楽譜とか、アコが上達するための練習法とか、アコの新製品の紹介とか、音楽面の記事が今も有益であることは、言うまでもありません。

日本でインターネットが庶民のあいだでも本格的に普及したのは西暦 2000 年代からです。

アコジャに掲載された記事や写真、情報、有益な知識は、ネットで検索してもヒットしないものが多いのです。

幸い、昭和 37 年から平成 18 年まで 44 年間に及ぶアコジャの全号は、現在、スキャンされ PDF 化されました。それらは、

谷口楽器

東京都千代田区神田駿河台 1 丁目 8-3

電話 03-3291-2711

ホームページ <https://taniguchi-gakki.jp/>

の店頭で閲覧することができます。

アコーディオンを愛し、音楽を愛した有名・無名の多くの人々の記憶とぬくもりが、この『アコーディオン・ジャーナル』の中に永久保存されています。

谷口楽器にお越しのさいは、ぜひ、手に取ってご覧にください。



【参考】 バンドネオンやコンサーティーナについての記事

アコジャには、アコーディオンだけではなく、バンドネオンやコンサーティーナの情報も時折、紹介されています。いずれも今となっては貴重な資料です。

バンドネオン関連の主な記事を拾ってみますと、私の見落としも多々あると思いますが…

- 1987 月 2 月号 日本音楽家ユニオン
アコーディオン・バンドネオン支部 名簿
- 1988 月 12 月号 バンドネオンは日本のように構えて考えるものじゃない
- 1989 月 5 月号 サンパウロの朝昼晩 バンドネオンのルーツを探る
- 1989 月 6 月号 サンパウロの朝昼晩 バンドネオン製作所
- 1989 月 9 月号 サンパウロの朝昼晩 素朴で楽しいバンドネオン
- 1990 月 3 月号 サンパウロの朝昼晩 バンドネオン工場落成式に臨む
- 1990 月 4 月号 サンパウロの朝昼晩 2 回バンドネオン大会に奏者 70 人
- 1990 月 8 月号 バンドネオンはやさしい!…中畔康亘
- 1990 月 9 月号 バンドネオンの弾き方はこれで OK!…中畔康亘
- 1991 月 7 月号 p.2 ハイブリッドバンドネオンの写真
- 1992 月 3 月号 日本居住のドイツ人バンドネオン名手をテレビが紹介
- 1993 年 9 月号 ブエノスアイレスの魂となったバンドネオンの魅力を探る



等々、バンドネオンのファンにとっては貴重な記事がときどき、載っています。

コンサーティーナ (concertina) という楽器名は、日本語ではまだ表記が固定しておらず、アコジャでの表記も「コンセルチーナ」「コンサーチナ」「コンセルチナ」「コンサーティナ」などの「ゆれ」があります。

昭和の時代、日本でまだコンサーティーナがほとんど知られていなかったころから、アコジャと谷口楽器ではコンサーティーナを扱っていました。

コンサーティーナについてのアコジャの主な記事は、私の見落としも多々あると思いますが、以下のとおりです。

- 1972年12月号 p.8 アコーディオンとその親せき コンセルチーナ
- 1973年2月号 コンサーチナ<六角型手風琴>その種類と音の配列・資料
- 1973年6月号 近々入荷 コンセルチーナでモチちゃおう コンサーティーナ
- 1974年1月号 p.2 コンセルチーナの水彩画 年賀はがき
- 1975年1月号 好評のコンサーチナで〜す!
- 1975年5月号 東ドイツ製コンサーチナ
- 1978年4月号 常磐ハワイアン・センター (福島県) のコンサーチナのピエロ人形
- 1979年2月号 坂田進一 コンサーチナ
- 1979年3月号 「アコーディオン150年祭の顔」坂田進一(コンサーチナ)
- 1979年6月号 坂田進一
- 1979年7月号 P.6 坂田進一コンサーチナ
- 1980年6月号 「日劇出演以来コンサーチナにさわってなかった」坂田進一
- 1980年9月号 コンツェルティーナとパンドネオンの知識
- 1980年12月号 p.7 コンセルチーナをひく男
- 1979年9月号 「名古屋でアコーディオン150年ミニ展」英国のコンサーチナ
- 1979年12月号 コンサーチナの人形の写真
- 1982年10月号 P.11 コンサーチナの坂田進さんを訪問
- 1985年6月号 こんな欲しい/コンサーチナのオルゴール
- 1987年7月号 米山永一 コンサーチナ
- 1991年12月号 p.4 コンサーチナ
- 1992年4月号 ギャラリー, コンサーチナ入門書他
- 1992年9月号 「米山永一さん」コンサーティーナ
- 1993年1月号 絵画 盲目の少女 コンサーティーナ
- 1999年冬号 「日本でも人気急上昇中の小型アコーディオンたち ダイアトニック・アコ、そしてコンサーティーナがかわいい」

遊び感覚で楽しむそう〜と最近、話題のコンサーティーナとダイアトニックアコーディオン。そのうれしいコーナーがここ空口楽器二階にある。

風情の広島大学での筆者。揮っているのは戦前のトンボ・ダイアトニックアコ“オリンピック”渡辺勤明氏の複製で、今も元氣。



日本でも

人気急上昇中の小型アコーディオンたち

ダイアトニック・アコ、そしてコンサーティーナがかわいい

加藤 徹

戦前の日本で最も普及していたアコは、いかにも「手風琴(てふうきん)」という感じの、軽くて小さな円筒型ダイアトニック・ボタン式アコでした。近年、ダイアトニック式の制御装置を多用する海外のさまざまなエレクトリック音楽(タンゴ、アイリッシュ・フォーク、ジャズ、

クラシック)の演奏に、独特の個性と特長があります。まず、鍵盤を押引操作するため歯切れの良いメリハリのよい音色が出せること、出せる音が限られることが半いしミスタッチも少なくてすむこと、リード数が少なくて済むので楽器を軽く丈夫にしあげられること(普通は今では

【付録】 金子元孝(万久)氏から谷口楽器への書簡

○2006年(平成18年)4月2日 投函

「谷口楽器社長 谷口賢様」宛 原文は便せんに縦書き

※改行は原文どおり。手書きなので毎行の字数はふぞろいです。

四月に入りましたが、まだうす寒い日が続いております。

今年に入って私は毎日繰り返しかえし自分の進退につきまして考えてきました。

元気を装って来ましたとは言え二、三年ほど前から生きることのつらさ

を感じております。若い日には想像つかないことでした。靴下一本はくにも

自力では大変になり、天眼鏡で原稿を書くつらさ、ネタ集めにも可成りの

骨折が負担となりその原動力の意欲を失っています。情けない事ですが

これでも仕事をしなければならないのかと思います。エキセルシャ―販促をうしろ

立てに私はアコーディオンが好きな一念で今日まで来させていただきましたが、

現在、本屋で「音楽関係」のコーナーを見てもレコードショップでも自分と関係のないものばかりだを見てもうダメだと思えます。

輸入元の移行は私にとっては機会を創ってくれたのだと感じました。アコ

ジャーナルこんなに長きに亘り継続するとは思いませんでしたし、アコの特殊性

かも知れませんが不思議です。419号を閉じとしてどうかアコジャーナルとけつ別

させて下さい。重ねてお願い申し上げます。有難うございました。

谷口楽器社長 谷口賢様

金子万久

○2007年(平成19年)6月15日 投函

「(株)谷口楽器 谷口賢様」宛書簡 原文は便せんに縦書き

※改行は原文どおり。文中の「思ひ」「自身喪失」は原文のままです。

坂田氏、前原氏とはOKしてくれまし

たが直接社長へT e l 行ったでしょ

うか。演題はお打合せ下さい。『アコーディオンを語る』集い

を機会に、出来ればはじめての人とか若い人が見えて

くれて店とのふれ合いが生れてくれるよう期待されるので

スケジュールも新しい人でも出来れば起用してみして下さい。

私は手も震えて字も思うにまかせませんで読みづらいと

思いますが御判読下さい。私も、やり度いことはやり

たくても頗るヤバくなっていて迷惑になると思ひ自身
喪失です。私の出番がダメのようでしたら
同封の伊藤志保さんのアイリッシュアコモど
うでしょうかご検討下さい。ヴァイオリン
とのユニットで面白いのではないかと思
います。

↓昨日、目黒の都の庭園美術館の『大正ロマン展』で
(私も大正生れなので)買ったポストカード一枚同封します。

2007年(平成19年)6月23日 投函

「(株)谷口楽器 谷口賢様」宛書簡 原文は葉書2枚に縦書き
(一枚目の葉書)

結論は無論、社長のご決断しかありませんが私
の一考として五回ご予約の人に左記のはがきを送
付しては如何でしょうか。

「この度びは当タニグチトークにご予約いたゞき
有難うございます。おかげさまで大変好評で反響
に驚いております。たゞ弊社の主旨として多くむの方
の御来場を期待しておりましたが、全回予約の
わずか二十五名様に占領される結果となり他
の方の入る余地が殆どない状態の結果となり
ますので、今回に限り五回の内二回をお選び
いたゞいて再度のご指定をお待ち申上げます。」
この方が講師の人気レベルも取れると思います。

【注 「回」の右横の空白に
「会」と添え書きあり】

(二枚目の葉書)

タニグチサンデートーク全回一席
ずつ金子アコ教室として予定して
おいて下さい。よろしく願ひいたし
ます。

金子先生は2007年(平成19年)7月10日に永眠なさいました。

金子先生、長いあいだ、ありがとうございました。